

統語構造と意味解釈のインターフェイス

多重主語構文を巡って

福田 稔・古川武史

1. はじめに¹

本研究では、終助詞「よ」・フォーカス・格助詞脱落の三つ巴の関係を捉える提案を行う。具体的には、フォーカスを受ける要素は音声的に具現化しなければならず、その環境にある格助詞の脱落はできないという条件のもとで、終助詞「よ」には2種類の派生導入があると論じる。また、多重主語構文での大主語に付く主格助詞「が」の脱落可能性を検討する。

2. 終助詞と「が」の脱落概要

Masunaga (1988)によると、脱強調化によって主題要素(theme)からフォーカスが取り除かれると、それに付加する格助詞は脱落可能となる。次の例では、終助詞「よ」によって、主語が脱強調化されるために、「が」の脱落が可能となる。

(1) ブロンドの男の子{が/φ}太郎を殴ったよ (Masunaga (1988: 148))

近年の遠藤・前田 (2020: 89-92)の刈り取り(truncation)による分析でも、フォーカスと終助詞と「が」脱落の三つ巴の関係が解き明かされたとは言えず、課題が残っている。

3. 文末要素の機能と構造

Miyagawa (2010: 19, 2017: 4)によると、日本語では、(フェイズ主要部である)C から T へ([focus]を含む)δ素性が継承され、TP 指定部への移動が駆動される。Miyagawa (2017: 165-166)は、(フェイズ主要部である)vも[focus]を持つ可能性を示唆している。さらに、Miyagawa (2022: 105)は、CP より上位に談話と関わる構造があると想定し、終助詞「よ」は Commitment Phrase (CommitP)の主要部に位置していると論じている。

本発表では、終助詞「よ」は、CommitP に直接導入される場合と、v(*)P の主要部に導入されて、CommitP へ移動する場合があると仮定する。後者の仮説は、構文派生の途中の段階で終助詞が導入されるという遠藤・前田(2020)の分析を部分的に援用したものである。この場合、v(*)の[focus]が活性化され、V へ継承されて、「外在化(発音)の際に強調して発音せよ」という指示が与えられる。例えば、(1)の「よ」によって「殴った」が強調される。このv(*)P と併合したCの[focus]は活性化されないので、TP 指定部の「が」主語はフォーカス(総記解釈)を受けない。そのため、(1)のように、「が」の脱落が可能となる。

4. 熊本方言における「の」主語

DP の格素性の与値に関して、西岡 (2022: 75)は、転送後に形態・音韻部門で当該 DP へ接近可能な格付与主要部が与値する可能性を論じている。属格に関しては、D が与値する場合と、これ以外の名詞性(N素性)を持つ要素による場合があり、前者の例は名詞関連節での「が・の」交替である。後者の例として、西岡(2022: 77-78)は、熊本方言に名詞性を持つ音声的に空のCがあり、(2)のような独立文の主語に属格「の」が付く事実を説明している。興味深いことに、前者の場合の「の」は脱落不可だが、後者の場合は(例えば(2)では)可能である²。

(2) 運動会で太郎の走った(げな) [共通語：運動会で太郎が走った(そうだ)] (西岡 (2022))

熊本方言の「の」主語はv(*)P 内部に留まり、TP 外部の名詞性を持つ要素(例えば空のC)が属格素性を与値する。「の」主語は、C から継承された[focus]を担う T より下位にあるため、フォーカスを受けず中立叙述となる。よって、「の」脱落は可能となる。

5. 「の」主語と文末要素の役割

実際のところ、熊本方言の話者は、(2)の文末に「げな」を置かないと座りが悪くなると判断する。歴史的には、「げな」は「気配なり」に由来するので(東 (1982: 23))、名詞性を持つ要素であると考えられる。これが属格素性を与値するのである。「の」主語はv(*)P 内部に留ま

り、フォーカスを受けない。また、属格素性を与値する要素が D ではなく、TP 外部にあるため、「の」の脱落は可能となる。このようにして、(2)での「の」の生起と脱落が説明される。

6. 多重主語と文末要素

共通語の多重主語構文(3)では、大主語「鹿児島と宮崎が」の「が」脱落は不可であるが、「うまい」に対する主語「焼酎が」では許される。

- (3) 鹿児島と宮崎が焼酎がうまい
- (4) (?) 鹿児島と宮崎が焼酎がうまい
- (5) * 鹿児島と宮崎が焼酎がうまい

西岡 (2022)の分析によると、(3)の「鹿児島と宮崎が」は TP 指定部にあり、C から T へ継承された[focus]のためにフォーカス(総記解釈)を受ける。一方、「焼酎が」は v(*)P 内部に留まり、フォーカスを受けない。この分析を前提とすると、前者の「が」は脱落不可で、後者の「が」は可能と予測されるが、(4)と(5)からこの予測が正しいことがわかる。興味深いことに、文末に終助詞「よ」を置くと(5)の判断が変化し、(6)のように適格となる。

- (6) 鹿児島と宮崎が焼酎がうまいよ

この事実は、(1)の「が」脱落と同じ理由で、「よ」は「うまい」を強調するため、大主語の「が」脱落が可能になると説明される。

熊本方言の多重主語構文では、格助詞「が」と「の」が主語に付くが、例えば(7)のパターンが最も自然である。

- (7) 熊本がスイカ畑の多かばい [共通語：熊本がスイカ畑が多いよ] (加藤 (2005))

この事例でも、熊本方言の話者は、無意識に文末に「ばい」を置き、「ばい」がないと座りが悪くなると判断する。実は、「ばい」は文末に置かれた(話者を指す)「わい」(我)に由来するという説がある(東 (1982: 92-94), 柳田 (1998: 268-270))。すると、「ばい」も名詞性を持つ文末要素であり、「スイカ畑の」の属格素性を与値するのである。「ばい」は共通語の「よ」に対応するので、(6)と同じく、大主語「熊本が」の「が」脱落が可能と予測される。(8)は、この予測は正しいことを示している。

- (8) 熊本がスイカ畑の多かばい

7. おわりに

本発表の議論を通して、Miyagawa (2022)や西岡 (2022)の分析が支持できることになる。遠藤・前田(2020: 87, 92-93)が指摘した(9)での「が」脱落については、今後の課題としたい。

- (9) ブロンドの男の子{が/φ}太郎を殴った?!!

¹ 本研究は JSPS 科研費 JP19K00666 の助成を受けている。

² 例文における下線は筆者による。

参考文献

- 遠藤喜雄・前田雅子(2020)『カートグラフィー』開拓社、東京。
東 秀吉 (1982)『球磨弁—助詞と助動詞と—』私家版、人吉市。
加藤幸子 (2005)「熊本方言における『が』と『の』の使い分けに関して」『言語化学論集』9, 25-36. < <http://hdl.handle.net/10097/48291> >
Masunaga, Kiyoko (1988) “Case Deletion and Discourse Context,” *Papers from the Second International Workshop on Japanese Syntax*, ed. by William Poser, 145-156, CSLI, Stanford, CA.
Miyagawa, Shigeru (2010) *Why Agree? Why Move?: Unifying Agreement-Based and Discourse-Configurational Languages*, MIT Press, Cambridge, MA.
Miyagawa, Shigeru (2017) *Agreement Beyond Phi*, MIT Press, Cambridge, MA.
Miyagawa, Shigeru (2022) *Syntax in the Treetops*, MIT Press, Cambridge, MA.
西岡宣明 (2022)「日本語の v*P 主語とラベリング」『ことばの様相—現在と未来をつなぐ—』66-81, 開拓社、東京。
柳田國男 (1998)「毎日の言葉」『柳田國男全集』第 15 卷, 筑摩書房、東京。